

しきなみ賞（敬称略）

最優秀賞（二名）

優秀（三名）

佳作（十五名）

ページ 1

3 2

しきなみ新人賞（敬称略）

最優秀賞（一名）

優秀（二名）

佳作（十四名）

7 6 5

しきなみ賞

【最優秀賞】

●銀色の髪

今野 かつ子（宮城・石巻・飛雲集）

- ・銀色の髪が優しくカールされ別の私が生れるサロン
- ・軽やかにカールが揺れるプラチナヘア―鏡の私が華やいでいく
- ・華やいだ気持のままに夫と会う揺れるカールに「ホッホオー」と戯^{たわ}ける
- ・セットした髪に手をやり然り気なくふれて無骨な夫の優しき
- ・銀色の髪を愛でつつあと一年金婚式をときめきて待つ

●息子

田中 アイ子（東京・多摩平・真砂集）

- ・馬鹿野郎の文字書きなぐり捨てし子のノートの切れ端心のかげら
- ・暴れてる馬鹿野郎の文字なぞりつつ今夜は作ろう子の好きな餃子
- ・吹き荒れた心の風も過ぎたらし日溜り宿す吾子の横顔
- ・その胸に深き海ありや青年となりし息子は潮の香のする
- ・ふうわりと我の掌中飛び立つやこの春吾子は大学生なり

【優秀賞】

●愛しむ

齋藤 妙子（千葉・千代田・群蝨集）

- ・大玉の西瓜のような腹抱え駅に微笑む日傘の嫁は
- ・ゆるやかな話し方から身の丈もよく似ているねと嫁と笑えり
- ・ガリバーのように繋がれ息つなぐ胎盤剥離の嫁を愛しむ
- ・親族^{うかた}らの視線浴びいる生れし児は小さき身伸ばしふーつと息吐く
- ・こんなにも笑みを湛えて孫抱ける吾のしあわせ写真に見入る

●瓜と子

瀬野 真樹子（福岡・室見・真砂集）

- ・台に立ち幼き吾子は得意げに小便小僧のごとく用足す
- ・ぐずり泣く赤ちゃんの傍に座りこみ吾子は差し出す好物のガムを
- ・いたずらを言いつけられるより先に自己申告へと吾子は駆け寄る
- ・まだ幼き我が子のような苦瓜を数日置きて眺め愛しむ
- ・見守ること忘れし吾の子育てを気付かせくれるゴーヤの栽培

●老婆と犬

于 振忠（中国・倫研北京事務所・飛雲集）

- ・軒下に伏せて仮眠の老犬に話止まらぬ老婆の孤独
- ・しわくちやの青筋立てる老婆の手ひたすら舐める愛乞う子犬
- ・とぼとぼと歩く老婆についてゆく物まねのごと老犬^{いぬ}の歩みも
- ・老犬の頭を撫でる婆さんの肩にはらりと落ち葉一片
- ・老犬と寄り添い歩く腰曲がりの老婆の背に夕日射しおり

【佳作】（五首中一首を紹介）

増田 壽子（宮城・宮城法人・真砂集）

・新春の浜に響くよ鎮魂を祈る人等の善意の鐘の音

木村 伴子（宮城・石巻・群螢集）

・息子の寢息夫の寢息に囲まれてさとうきび揺する風の音聴く

向田 美代子（茨城・飯島・群螢集）

・春の陽にかがよふ沼は吹く風に一足おくれのさざなみを生む

小野崎 ミサ子（東京・日暮里・群螢集）

・さりげなく煙草くゆらす亡き夫の横顔ずつと見ていたかった

山崎 了司（東京・上目黒・飛雲集）

・屋下がり児らの遊べる公園のベンチ三つに老いひとりずつ

土木 正美（東京・今井・群螢集）

・終戦後の我が母子手帳にさとう切符交付済との配給の記事

徳江 一子（神奈川・都筑区・群螢集）

・薪を燃し餅米蒸ける匂いして夫と長男婿もつき手に

佐藤 三枝子（静岡・小山・真砂集）

・「おばさん」と会ったたび呼びし女のこと幼ごころに実母と知りおり

前里 壽子（香川・松島・飛雲集）

・教員のしがらみを解きわたくしは気軽に身軽に綿毛とならむ

立花 壽子（佐賀・与賀町・白光集）

・「補聴器はもういりません」と治癒告げる男孫の主治医の声の明るし

本多 陽子（熊本・長嶺・群螢集）

・外出の思うようにはできぬ吾ガラスの青さに秋の風知る

山田 弘子（熊本・菊池・群螢集）

・束の間の残照のなかバス待ちて今別れ来し病む夫思う

有馬 順子（鹿児島・鹿屋寿・飛雲集）

・「あなたもね親になつたらわかるから」子を持たぬ吾に虚しく響く

大島 安徳（鹿児島・龍郷・群螢集）

・老ゆるとはかくも尊きものなるや病みて支へ合ふ老老介護

下地 能子（沖縄・下地・真砂集）

・姑の遺影を舅は傍におき生あるごとくテレビ見せおり

しきなみ新人賞

【最優秀賞】

●ふるさと

鈴木 君江（岩手・花巻）

- ・ひとつぶもただひとつぶもこぼすまいにねいに研ぐ福島の米
- ・このおいこの歯ごたえと味わえり二年ぶりなるふるさとの米
- ・きらきらと光りかがやく米つぶに父母の愛ひしと伝わり
- ・干しいもをひとかみひとかみするたびに目に浮かびくる父母の顔
- ・ふるさとは遠くにあると思いがわが身のうちに広がる野山

【優秀賞】

● 寒の夜に

安部 ムツ子（神奈川・淵野辺）

- ・ 寒の夜を温ぬくき毛布にくるまりて安けく寝入る二十九の息こ子
- ・ 降る雪を吸いて凍りし池の底あ緋めだか棲むと吾息こ子に話せり
- ・ 冬いちこのみどり葉むしりかぶりつく視力なき息こ子はうまそうに食はむ
- ・ 目に見えぬテレビを聞きて身をよじる楽しき想い湧くらし吾息こ子は
- ・ 寒の夜に流星数えし二十歳はたちの息こ子命永らえはや二十九歳

● 今日も朗らかに

寺西 邑子（広島・三篠）

- ・ 歩道橋かけ登りゆく若き娘こをまぶしく見やる杖つきし身は
- ・ 深海にただよう海月くらげさながらに黄のアドバルーン秋空高く
- ・ 休日のひとり遊びやジユク堂本の森とぶ小鳥のように
- ・ ひとり居の食事作りは幼な日に貝殻集めたままごとの様
- ・ 亡き子への憶い真空パツクして今日も朗らかに生きんと誓う

【佳作】（五首中一首を紹介）

梅宮 美喜子（宮城・宮城法人）

・まとまらずいく度止めよと思つたか夫の美点を紡いで百首

今村 典正（福島・福島中央）

・ふたりしてメールの代りに短歌詠むコミュニケーションの新たなかたち

池田 弘恵（埼玉・忍）

・カフェに座す吾もひと時の旅人よ介護する老母はは家に残して

金子 新司（千葉・勝田台）

・「ウンチ出た」寝たきり母のその声に心春めく何とはなしに

中平 大資（東京・高田馬場）

・長年の溝を埋めんと照れつつも母との会話訛りて話す

松本 美和子（神奈川・大町）

・夫逝きて五年いっとせたちて娘ごは父の蔵書を選びて帰りぬ

青山 恵津子（神奈川・登戸）

・人波にひと日の疲れ置き去りにせんと急ぎぬ渋谷の街を

赤澤 秀子（神奈川・登戸）

・じゃが芋の皮を剥きつつ唐突に隣の母が小さく見ゆる

大山 栄子（愛知・吉田）

・笑顔にて「明日退院」夫の言う会話のはずむ午後の病室

田淵 祐子（大阪・高槻）

・短歌から家族の会話ふくらみて皆の笑みが嬉しいこの頃

伊藤 美瑞恵（兵庫・平荘）

・スヤスヤと眠った我が子「さあ今だ」ダッシュで買い物夕飯準備

一宮 恵子（徳島・板野）

・三日月と梅の蕾と口笛はつくづく母の好きだったもの

福田 真弓（福岡・遠賀）

・亡き兄を歌に詠もうとするだけで鼻の奥がツーンとしてくる

眞泉 和久（鹿児島・帖佐）

・誰よりも優しき心持ちし子の独り苦しむ病ぞ哀れ